

八木 克正教授退職記念号によせて

社会学部長 荻 野 昌 弘

八木克正先生は、1967年に、神戸市外国語大学外国語学部英米学科を卒業後、兵庫県立姫路産業技術高等学校で教鞭を執られながら、1973年には、神戸市外国語大学大学院外国学研究科英語学専攻修士課程を修了され、1975年から帝塚山短期大学に講師として赴任されています。1985年に、同大教授、1996年に帝塚山大学教養部教授に就任され、1997年から関西学院大学社会学部に教授として赴任され、学部のみならず、大学全体の英語教育を担ってこられました。特に、2001年に設立された言語コミュニケーション文化研究科の初代研究科長に就かれ、研究科の礎を築くうえで、多大な貢献をされました。また、研究科の指導教授として、多くの研究者を育てられています。

学会活動においては、日本英語コミュニケーション学会学術担当理事、日本英語音声学会副会長、英語語法文法学会会長などを歴任され、英語教育、言語学の領域において、研究の発展ために尽力されてこられました。

先生は、ご自身の研究歴を三つの時期に分けておられます。まず、20代から30代半ば、辞書の編纂や生成文法を学ぶなど、研究者として歩み始めた時期（第一期と呼びたいと思います）。次が、30代後半から50代までの研究者として「離陸」し、成果を矢継ぎ早に出された時期（第二期）。そして、60代のフレイジオリジという研究分野を確立されつつある時期（第三期）です。第三期は現在進行形で、みずからが代表を務めるフレイジオリジー研究会を中心に、独自のフレイジオリジー研究に邁進されておられます。

先生の研究の出発点は、素朴でありながら、根本的なひとつの問いから出発しているように思われます。それは、なぜ日本語の学習文法では、実際には使われない文例が教えられているのかという問いです。先生は、この問いに答えるため、まず、学習文法の歴史的生成過程について綿密に調べられ、言語が変化するにもかかわらず、学習文法は固定化されているところに、その問題点を見出されました。第1回日本英語コミュニケーション学会賞（学術賞）を受賞された『世界に通用しない英語－あなたの教室英語、大丈夫？』（開拓社、2007年）の第二章では、「学習文法の形成」について大変わかりやすく説明されています。

そこで明らかにされているのは、日本の学習文法において、実際に使われていないような文例が出てくるのは、それが規範文法であることに起因しているという点です。規範文法とは、「規則を定めてそれに言語使用を従属させようとする」文法であり、イギリスで18世紀末に確立した文法です。日本人は、明治期に英語習得の必要性に迫られたわけですが、その際に規範文法を導入したため、それが長い間、英語教育に影響を及ぼすことになったというのです。

先生は、規範文法に対して、科学的文法研究を提唱されています。それは、「言語事実を忠実に記述し、それを説明する方向へ向かう」研究です。これは、生成文法のように、言語全般の構造を探るのではなく、英語のような個別言語に着目する立場であると思います。長い間数多くの辞書の編纂に携わってきた先生が、このような帰納的な方法を選択するのは必然であったかもしれません。

こうして、先生は、帰納的方法による文法研究を通じて、実際に運用されている文法の説明を可能にする新たな言語研究に向かわれます。その最初の大きな成果が、第1回英語語法文法学会賞を受賞された『英語の文法と語法－意味からのアプローチ』（研究社、1999年）です。そこで、提唱されている「意味的統語論」は、意味は目に見えないが、成句やコロケーションなどの形となってあらわれるという考え方

に立ちます。

ただ、この受賞作は、その後の研究の展開の出発点にすぎません。先生は、より大胆に、新たな言語研究として「フレイジオロジー」を提唱され、2010年に「フレイジオロジー研究会」を立ち上げられています。フレイジオロジーは、言語の個別性に着目し、抽象的な文法規則ではなく、成句や熟語の分析を通じて、個別言語表現の特徴を探ることで、言語について解明しようとする学問です。個別性に着目しているので、フレイジオロジーは、当然言語と文化や社会の結びつきについても注目することになります。先生は、社会学部教育においては、「社会言語学」を講じておられますが、言語と文化の関わりを実証的に解明するという点で、フレイジオロジーは、社会学部教育においても意義を持つものであるといえましょう。

先生は、最終講義の最後に、これからの仕事として四つの課題を挙げられました。それは、まさにこれから新たな研究のステップに踏み込もうとする若々しさを感じさせるものでした。すでに膨大な業績がある先生に対して、大変失礼な言い方かもしれませんが、これから次々と研究成果を出していこうと期待させる新進気鋭の研究者の雰囲気を感じたといってもいいかもしれません。ぜひ、今後も独創的なフレイジオロジー研究の成果を生み出していただきたいと願っております。